

『ヘンリー二世』研究

一心象描写に富む復讐悲劇： ジョン・バンクcroft 『ヘンリー二世』 —

國 崎 倫

1. はじめに

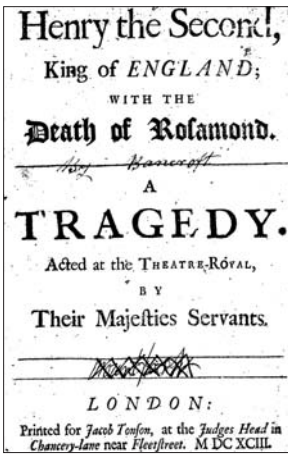
1653年9月9日、モーズリー（Master Mosely）によってロンドン書籍商組合に『ヘンリー一世とヘンリー二世 シェイクスピアとダヴェンポートによる』と銘打たれた戯曲の原稿が持ち込まれ、登記簿への登録を済ませた。この戯曲のテキストは残念ながら現存しないが、1597年に出版されたマイケル・ドレイトンによる『イングランド英雄の書簡』（以下『書簡』と略記）と、1612年に出版されたトマス・デロニーによる恋愛詩「美しいロザモンドの死」、この二作品が材源であったと推定されている。

「失われた戯曲」の内容は不明であるが、執筆年とジャンルについて、ウィギンズは著書 *British Drama* のなかで、この戯曲の存在を示す証拠は書籍商組合への登録のみであるとし、おそらく歴史劇であったと推測している。執筆年代について、もしダヴェンポートが執筆に関与したと想定するならば、1623年から1634年までの期間であり、他の人物によるものであれば、1600年から1642年までの期間であると考えている。Lost Plays Database はジャンルの特定について、この戯曲が歴史的恋愛劇であった可能性も示唆している。

ドレイトンとデロニーがそれぞれ執筆した作品が後続の作品群に与えた影響は色濃く、「失われた戯曲」が歴史劇や歴史を物語る恋愛劇であったとする考

えは妥当である。しかし、「失われた戯曲」が書籍商組合への登録を済ませた1653年のあと、次に登場するヘンリー二世関連作品は全く異なる性質を帯びていたことに注目しなければならない。それが、ジョン・バンクcroft（1655-1696）による復讐悲劇『ヘンリー二世』である。

本稿ではまず、バンクcroftによる戯曲の特徴である豊かな心象描写と複雑に絡み合う復讐悲劇を考察することで、周辺作品との類似点と差異、独創性を明らかにする。そのうえで、「失われた戯曲」との相関関係を探る手立てを考えたい。



2. ジョン・バンクcroft『ヘンリー二世』

1597年にドレイトンによる『書簡』が出版され、それから約一世紀後の1693年、劇作家兼医師であったジョン・バンクcroftによる戯曲『ヘンリー二世』が出版された。戯曲の構造はダブル・プロットである。従来関心を集めていたはずのロザモンドとヘンリー二世の恋愛はサブ・プロットへと後退し、トマス・ベケット暗殺事件に関する復讐悲劇がむしろメイン・プロットとして取り扱われている。ここに確認できる戯曲の複雑化という特性が「失われた戯曲」からの継承であるのか、それともバンクcroftによる完全な独創であるのかは判断が不可能であるが、本戯曲が周辺の作品群において異色であることは間違いない。

まず、登場人物の層が厚くなっている。ドレイトンの『書簡』においては、ロザモンドと国王ヘンリー二世のみ、デロニーによる恋愛詩「美しいロザモンドの死」においては王妃エレノアとトマス・ボーガン卿、若ヘンリーが加えて登場していたが、バンクcroftは、1170年にカンタベリー大聖堂にて暗殺さ

れた大司教トマス・ベケットの復讐を企てる首謀者としての修道院長、その手先となる司祭らなど、教会側の鎮まることのない怒りを加えて、復讐悲劇に仕立てたのである。

2-1. 豊かな人物描写

本戯曲は1692年11月8日から短くとも11月14日午後にメアリー二世の臨席を賜るまで、連日上演されたようである。書簡形式や歴史書、恋愛詩として語り継がれたモチーフを下敷きにして、バンクロフトは登場人物の心象を豊かに描くことで物語を上演に耐え得る量と長さへと膨らませた。顕著な例として、ロザモンドに愛妾の強かさや腹黒さを内面的魅力として与えている。

まずバンクロフトは独創性を発揮する土台として、ドレイトンが『書簡』において記したロザモンドのヘンリーに対する拒絶、デロニーに代表される国王と愛妾の悲恋のモチーフを部分的であるが忠実に再現した。二幕二場、ロザモンドは廷臣トマス・ボーガン卿を「女衒（“thou venerable Bawd” C4^v）」「地獄の囚人、美德への裏切り者（“thou Prisoner of Hell, Betrayer of all Innocence and Virtue” E3^v）」と嫌悪し、己の穢れを“a wretched Conquest” “Infamy and Shame” (D1^r; D4^v)、 “infection” “Blasphemy” (D1^v) と称して呪う。国王へ「死こそが慈悲だ（“kill me, that will me a deed of Mercy” D1^v）」と心身の解放を懇願し、三幕ではエレノアに対して「私は国王に求められた義務を果たしたに過ぎず、責められる理由など無い」、「忌まわしい運命が家名を汚すまで、私には純潔で高貴な血が流れていた」と反論する。ロザモンドは運命が己の意思に反するものと主張しているが、これらは全てドレイトン『書簡』から引き継いだ特徴である。一方、デロニーによる恋愛詩「美しいロザモンドの死」からは、小姓の^{くだり}行を継承している。

Rosa. Let me go with you.

King. Impossible!

Thy tender Body cannot brook such usage,
As the Necessity of War throws on us.
Rosa. I'll like a Page attend you where you go,
Run by your side, and Watch your Sleeping hours,
And in the Fight I'll always met your Danger. (G1^v)

ヘンリーはフランスにて若ヘンリーの謀反を鎮圧するため暫しの別れを告げるが、ロザモンドは「小姓のように傍に仕え、貴方が眠る間は私が見守る」と申し出ている。

国王への拒絶と献身的愛情、これら相反する要素を巧妙に繋ぐ糸として、バンクcroftは愛妾の強かさと腹黒さを加えた。国王の寵愛を拒絶していたロザモンドの態度を変えたものは、嫉妬に狂いながらも夫の関心を取り戻そうとする孤独な王妃エレノアの姿である。

Queen. [...]
Last night, last Night, canst thou deny the Blessing,
When in the Arms of my most Treacherous Lord
You Laugh'd and Revell'd the short hours away,
Whil'st I in ignorance expecting lay? (E1^{r-v})

Queen. What canst thou plead,
What urge in thy Defence, thou guilty fair one?
Hast thou not Rob'd me of my Souls best thought?
For ever torn my interest from his Love? (E1^v)

夜な夜な冷たい寝所で眠る王妃が、夫の愛を略奪した愛妾を殺害しようと襲い掛かると、ロザモンドはヘンリーが如何に優しく愛してくれたかを詳細に語る。

ここで、かつて無辜であることを強調されていたロザモンドを扇動するものは、正妻の前で国王の寵愛を独占することの優越と快感であることが示唆されている。ロザモンドはエレノアに対して「私を殺しても、貴女は国王に嫌われて惨めな一生を過ごすだけ。ヘンリーが必ず復讐してくれる」と挑発し、暗殺を免れるための道具として国王の庇護を利用する。敵対する二人の女性の機微を描き、それまで外見的な美が称賛されていた愛妾に醜悪な狡猾さという内面的魅力を生きるための術として与えて多面的に仕上げた点は、周辺作品群において際立つバンクロフトの功績であると考えられる。

2-2. 絡み合う三つの復讐

本戯曲は歴史劇や恋愛詩の要素を包括した復讐悲劇であり、三種類の復讐が互いを利用しながら複雑に絡み合う構造を可能としている。トマス・ベケットを暗殺された教会側の復讐、夫を奪われた王妃の愛妾への復讐、ロザモンドを殺害されるヘンリー二世による王妃と息子への復讐である。

2-2-1. 教会のヘンリー二世に対する復讐

バンクロフトの最大の貢献は、トマス・ベケット暗殺事件をメイン・プロットに据え、劇中世界を掌握する修道院長を設定した点である。彼には名前が無い。社会的役職しか与えられておらず、匿名に近い。しかし、周辺人物を俯瞰して駒として動かす劇作家のような立場を与えられている。

一幕一場、コーラス役の三名（Sussex, Verulam, Aumerle）が、色で毫碌する国王と若ヘンリーのノルマンディーでの謀反に加え、トマス・ベケットの死に言及する。この時点で、バンクロフトは本戯曲が歴史書や恋愛詩とは異なることを早々に観客へ宣告する。

Veru. [...]

Then *Becket's* Death, that Patron of Rebellion,

That Traytor to the King and all his Int'rest,
Was introduced;[...] (B1^v-B2^r)

修道院長の意識において、暗殺されたベケットが「復讐の庇護者」となり天上から見届けているという構造で舞台は進行する。

Abbo. Now Becket, if thy Ghost
Will look so low as us that will revenge thee,
Dart from they Saints bright Rays, a Providence
That may encircle and protect our Actions:
[...]
Thus my Revenge I'll back with Jealousy;
A Rival is a plague that tortures Woman
Worse than her being cross'd in her Ambition. (C3^v)

修道院長は国王の配下であるように偽り、目立つ行為を慎む。彼が己の手を汚すことは無く、二幕一場、二人の司祭と共にエレノアのロザモンドへの嫉妬、国王の正妻に対する嫌悪を利用しようと企てる。

Abbot. He's caught:
The Great Leviathan is caught;
Now let him Roar, and fill the Air with clamour,
Spout up an Ocean, lash himself with Rage,
And Foam with smart of his deep piercing Wounds.
Oh! Thou dear Manes if my Patron Becket,
If what I'm doing's worthy in thy Eye,
Smile on thy Vassal toyling for revenge. (F2^v)

このように始終目立つことを避けていた修道院長が、ロザモンドの死後、間接的復讐を果たした喜びから正体を明かす。

King. Speak Fury, What could urge thee to this deed?

Abbot. Remember Becket- and then shake with horror.

King. Away with him to death.

Abbot. Thou dar'st not kill me *Henry*;

Too much o'th' Churches Blood hangs on thy Head:

If thou tak'st mine 'tis multiplying Murder.

King. Thou shalt not live, tho' I appeal unto his Holiness.

Sir Tho. That's asking my Fellow if I'm a Thief. —

There's Justice cheaper for you: [*Stabs the Abbot, who falls.*

Sink Pulpit Furniture.

Abbot. 'Tis done, and all your torturing Projects are prevented.

But Monarch, here I Prophesie thy Ruin! To Becket's Shrine thou must a Pilgrim go, the Church has vow'd it; shun it if thou canst.

And next thy Son; Thy Son shall wear thy Crown in thy own Life time. Becket, thy Hand, and Guide me, for I'm coming. (H2^{r-v})

劇作家のように背後で駒を動かしていた人物が、束の間正体を晒す。ここでヘンリーに問い詰められた修道院長は「ベケットの恨み、思い知れ」と国王に襲い掛かるが、トマス・ボーガン卿に刺殺され、「ベケットよ、導いてくれ」と言いながら絶命する。名前のない人物が歴史上の権力者を復讐悲劇へ追い込もうと試みたわけであるが、始末されて記録から抹消される過程は普遍的であると同時に、観客に同情の余地を与えたと考えられるだろう。これはドレイトンとデロニーの作品には無い、匿名性という性質を理解したバンクロフトの独創だと認められる。

2-2-2. 王妃エレノアの愛妾ロザモンドに対する復讐

王妃エレノアは、アキテーヌ公家からフランス王妃となり、婚姻関係の無効を唱えた後、次いでイングランド王との婚姻により中世の西欧における広大な領土と支配権を得て、宮廷文化の興隆に貢献した。この卓越した人物の孤独と弱さを、バンクロフトは脚色したと言えるであろう。夫を奪われたエレノアのロザモンドに対する復讐は、自発的なものとして描かれていない。王妃の嫉妬は修道院長により誘導され、彼女は主体性を奪われている。

三幕、エレノアからの問い、“Is my Bed abus’d?”(D4^r) に対する修道院長の返答、「国王の心を得ているのはクリフォード家の娘であり、王妃は無に等しい存在」は、王妃の矜持を意図的に傷つけるものだ。

Abbot. 'Tis sad Truth indeed; but for it is,
The Lord if Clifford's Daughter, *Rosamond*,
Wears the King's Heart, and you are but a Cypher. (D4^r)

“Would I were dead”(E2^r) と吐露し、精神的に衰弱したエレノアの純粋な愛情は、修道院長らに利用される。修道院長は王妃に国王の裏切りを報告した後、冷静になるようにと諭すふりをしながら愛妾殺害を示唆し、教会が王妃の味方であると信じ込ませている。

Abbot. O horrid Resolution!
Would you add Murder to Adultery,
And make your self as wicked as the King?
Queen. Why didst thou tell me then this cursed story?
Bert. Let Heav'n Revenge you.
Queen. I'll not stay so long.
Abbot. The Church shall Right you. (D4^v)

さらに修道院長はエレノアに、「国王は戦が終わったら教会に認めさせて、エレノアを廃位してロザモンドを王妃に据えようとしている」と吹き込む。これにより憤るエレノアは、ロザモンド刺殺を提案するが、修道院長は「毒殺のほうが確実に痕跡が残らない。国王の不在中に実行しましょう」と導く。デロニーが恋愛詩「美しいロザモンドの死」において歌い上げ、以後約百五十年間需要を維持することになる悲恋のモチーフを、バンクロフトは修道院長による考案であるとして塗り替えているのである。

Queen. How! Shall she dye then?

Abb. As Vermin do by Poison:

It makes no noise, and is a certain Servant.

Queen. But when?

Abb. Not till to morrow,

When the Kings absence will assist

The undertaking.

[...]

Abb. And if her Vengeance from its purpose start,

Stars! 'tis your fault, I'm sure I've done my part. [*Ex. Abbot.* (F4^r)

夫婦の仲違いは意図的に操作されたものであり、修道院長は「王妃の復讐が果たされれば、私の役目（復讐）が果たされるのも確実」と期待する。トマス・ベケットを暗殺された怨恨は、ヘンリーが大切にしている愛妾の命を王妃が奪うよう仕向けることで間接的に果たされ、復讐の連鎖が生み出される。

2-2-3. ヘンリー二世による王妃と息子らに対する復讐

教会はベケットを、王妃は夫を、国王は愛妾を失い、ヘンリーは妻から息子を奪おうと決意する。複数の復讐が連鎖する過程もバンクロフトの作品におけ

る特徴である。

二幕四場、ヘンリーは修道院長に「彼女の内面の美まで理解できるのは私だけ」とつぶやき、愛妾を天使や女神に喩えて称賛した。修道院長が「王は既婚者です」と諭す場面は観客からすればコミック・レリーフであるが、王妃との婚姻関係の希薄さを国王に意識させるための策略として描かれる。

King. What? Oh, Comfort Priest, and I'll resign my Crown;
The Church shall govern all. [*Sure that will bribe thee*]. *Aside.*

Abbot. "Twas a strange Marriage; She only was Divorc'd
When you espouz'd her, --- She partly was anothers.

King. Nay, I did never think our Marriage Lawful;
What think you Holy Sir? (F2^r)

ここで修道院長は「そもそも奇妙な結婚で、王妃はルイ七世と離婚したばかりだった。国王が娶ろうとした時も半ば前夫であるフランス王ルイ七世のものだった」と示唆し、「合法の婚姻関係ではない」と国王に言わせている。夫婦間の仲違いは復讐への下準備である。

エレノアにより毒杯を強要されたロザモンドは薄れゆく意識の中、「先に逝ってお墓を温めておく」と言い残し、感動的絶命を遂げる。歴史上の権力者エレノアが敵の死に心痛し、「私を殺していいから、三人の息子の命は助けてほしい」と懇願する様は、復讐の連鎖を観客に期待させている。

King. [...]

Oh *Rosamond*! Thou shalt be Nobly follow'd;
Of my own Bowels I will make Attonement!
And my Curs'd Queen shall find her Rage outdone,
For I'll Revenge thy loss upon her Son. [*Ex.* (H2^v)

ここでヘンリーがエレノアを即座に罰することはない。愛妾を毒殺された王は、王妃に大切なものを失う悲しみを同様に与えることで復讐を果たそうとする。ヘンリーは、ルイ七世の協力を得て謀反を企てる若ヘンリーを討伐することでエレノアに対する間接的な復讐を果たすと静かに誓い、本戯曲はオープンエンディングのまま終幕する。

3. おわりに

国王と愛妾の物語は世に溢れている。ホリンシェッド『年代記』やドレイトン『書簡』において語られる史実と、デロニーによる印象的な恋愛詩が約百年間読み継がれたところに、バンクcroftの戯曲がトマス・ベケット暗殺事件を加えた復讐悲劇として上演され、出版された。豊かな人物描写と連鎖する復讐悲劇が「失われた戯曲」からの影響や継承でなければ、すべてバンクcroftの功績として称えられるであろう。

1653年に書籍商組合への登録を済ませたとされる「失われた戯曲」が現存しない以上、その内容は不明である。しかし、ヘンリー二世関連作品として1693年に登場するジョン・バンクcroftによる復讐悲劇『ヘンリー二世』は、戯曲というスタイルにおいて共通項をもつ。バンクcroftの戯曲に確認できる特徴が完全な独創であるのか、もしくは「失われた戯曲」がそうであったのか、この点を明らかにする手がかりが興行収入記録や日記としてどこかに現存することが望まれている。そうすれば、先行研究が指摘するジャンルの特定、つまり、「失われた戯曲」は歴史劇もしくは歴史的恋愛劇であったとする見解に、復讐悲劇であったとする可能性を追加することが可能となる。しかし、テキストが現存しない今日、バンクcroftの功績を称賛するに留まるしかなく、1653年から1693年までの空白の時間が埋まらないのである。

参考文献

- Bancroft, John. *Henry the Second, King of England, with the death of Rosamond a tragedy, acted at the Theatre-Royal, by Their Majesties servants*. London: Printed for Jacob Tonson ..., 1693. Wing / B634
- Deloney, Thomas. *The life and death of fair Rosamond King Henry the Second's concubine*. London: Printed and sold in Bow-Church Yard, London, 1750. Wing/ 2123. 2: 714-715
- Drayton, Michael. *Englands heroicall epistles*. London: Printed by I[ames] R[oberts] for N. Ling, and are to be sold at his shop at the vvest doore of Poules, 1597.
- Holinshed, Raphael. *The Third volume of Chronicles, beginning at duke William the Norman, commonlie called the Conqueror...* London: printed [by Henry Denham] in Aldersgate street at the signe of the Starre, 1586. STC (2nd ed.)/13569 p.115
- Lost Play Database (https://lostplays.folger.edu/Henry_II)
- Oxford Dictionary of National Biography*: in association with the British Academy: from the earliest times to the year 2000. Edited by H.C.G. Matthew and Brian Harrison. Oxford; Tokyo: Oxford University Press, 2004
- Wiggins, Martin. *British Drama 1533-1642: A Catalogue*, vol. VIII: 1626-1631. Oxford: Oxford University Press, 2017.